

# 大村西崖著『密教発達志』訳注研究（四）

元山公寿

本研究は、大村西崖（1868～1927）によって著された『密教発達志』を書き下して、現代の研究成果を参考にしながら、詳細な脚注を加えることを目的としている。本論文は、昨年までに発表したもの<sup>①</sup>の続編で、第一章の「教の興りより隋に至るまで」の第二十五節「仏図澄の呪術」（底本の五十八頁）より、第三十五節「仏陀跋陀羅の訳経」の第九項「夜摩天」（底本の七十三頁）までである。

以下に、訳注に当たった凡例を記す。

## 凡例

- 一、 大村西崖著『密教発達志』（国書刊行会、1972覆刻）を底本とした。
- 二、 旧漢字は、当用漢字に改めた。
- 三、 書き下すに当たって、可能な限り、大村の返り点にしたがい、適宜、段落分けをした。
- 四、 大村による割り注は○で示した。
- 五、 経典名や著作名には『』を、引用文には「」を附した。

- 六、人名には、可能な限り  $\text{㊦}$  によつて生没年、国王の場合は在位を補い、インド名が附されていない場合には、そのインド名を補つた。
- 七、地名に關しても、可能な限り  $\text{㊦}$  によつてインド名、及び現在の地名を補つた。
- 八、年号に關しても、 $\text{㊦}$  によつて西曆年を補つた。

## 密教發達志卷一

日本 大村西崖撰

## 一、教の興りより隋に至るまで

## 二十五、仏囟澄の呪術

然るに當時、呪術を能くする者、すでにその人あり。竺仏囟澄（ $\sim 348$ ）、西域の人にして、本姓、帛氏なり。少くして出家し、再び罽賓（Kashmira、現在の Kashmir）に到る。永嘉四年（310）、洛陽に来る。善く神呪を誦し、鬼物を役使し、麻油、燕脂と雜え、以て掌に塗る。千里の外事、皆、掌中に徹見すること、面を対すが如し。また能く潔斎者をして、これを見せしむ。また鈴の音を聴きて、以て事を言う。備に効験せざるなし。

嘗て後趙（319～351）の石勒（319～333）を詣し、応器（patra）に水を盛り、香を焼き、これを呪して、須臾に青蓮花を生ず。これに由りて、勒の信服する所となる。あるいは龍を呪して、襄城の湮水の竭を満ち、あるいは楊杖を取りて、これを呪し、以て石季龍（石虎、334～349）の子の斌（ $\sim 349$ ）の死を起こす。また善く未然を察し、一として中らざるなし。建武十四年（348）（東晋の永和四年）十二月八日、鄴宮に卒す。春秋、一百十七なり。

平生、氣を服して自養し、あるいは累日、食さず。腹旁に一孔あり、常に絮を以て、これを塞ぐ。夜、書を読まんと欲さば、すなわち絮を抜き、孔中に光を出す。齋時、平旦に流水に至り、孔中より臟腑を出して、これを滌う（『法苑珠林』六十一、『高僧伝』九、『晋書』九十五）。

## 二十六、訶羅竭の呪術

訶羅竭（～288～）、樊陽〔現在の河南省済源〕の人なり。少くして出家し、太康九年（288）、洛陽に至る。時に疫疾の流行、甚だし。竭、為に呪して、これを救治し、十に八九を瘥す。元康元年（292）、西し、止婁に入る。石室に禪座し、八年に至りて化す。弟子、これを闡維するも、灰燼せず。後に西域の人の竺定なる者あり。東晋の咸和（326～334）中に、往きて、その屍を視るに、嘗然として平坐す。已に三十余年なりと云う（『高僧伝』十）。

## 二十七、耆域の呪術

耆域は、天竺<sup>①</sup>の人なり。華戎を周流し、常所あることなし。天竺<sup>②</sup>を発ち、扶南（Funam、現在のカンボジア南部）に至り、諸の海濱を経て、交わるること広きに及び、並びに靈異あり。恵帝（290～306）の末に、洛陽に達す。時に衡陽（現在の湖南省衡陽）の太守滕永文、洛にありて病を得、年を経とも差えず。両脚、彎屈して、起行すること能わず。域、すなわち楊柳を以て、浄水を拂い、永文に向いて呪す。手を以て、永文の両脚を搦りて、起たしむ。すなわち行歩すること、故の如し。また枯樹を呪して、回生せしむ。また一人あり。癩を病みて、まさに死せんとす。域、応器を以て、病者の腹上に著け、白布を以て、これを通覆し、呪願すること数千言、すなわち臭気、一屋を徹するあり。病者の曰く、「我れ活く」と。域、人をして布を挙げしむ。応器の中に、淤泥の若き者、数升あり。臭いて、近づくとべからず。病者、遂に差ゆ。域、後に西域に還り、終る所を知らず（『法苑珠林』六十一・『高僧伝』九）。

## 二十八、天竺の人の幻術

永嘉（307～313）中に天竺<sup>③</sup>の国の人にして、江南に至る者あり。数術を善くし、能く舌を截ち、断を続け、火を吐き、変化す。此の如き幻術、作す者、一にあらず、天下、方に乱ると云う（『法苑珠林』七十一）。

## 二十九、難陀、呪明を結集す

龍樹の弟子にして、能く呪明を伝うる者、難陀 (Nanda) とす。その出世、まさに西晋の交 (316 ~ 317) にあるべし。『西域求法高僧伝』(巻下) に云く、「時に彼(龍樹)の弟子、その号、難陀なり。聰明博識にして、意をその典に漬く(持明呪蔵)。西印度にありて、十二年を経て、専心に呪を持し、遂に便ち感応す。食時に至ることに、食、空より下る。また呪を誦して、如意瓶を求むるに、久しからずして、便ち獲。すなわち瓶中に於て、経を得て、歡喜す。呪を以て、結せざれば、その瓶、遂に去る。是に於て、難陀法師、呪明の散失すを恐れ、遂に便ち十二千頌ばかりを撮集し、一家の言と成る。一頌の内におけることに、呪印の文を離合す。また言同、字同といえども、実には、すなわち義別、用別なり。口相伝授にあらざるよりして、実に解悟するに、因なし。後に陳那 (Dignāga, ca. 480 ~ 540) 論師(蕭梁 (502 ~ 557) の代に当たる) の製作を見るに、功、人智を殊にし、思、精端を極む。経を撫で、歎じて曰く、嚮にこの賢をして、意を因明 (hetuvidyā) に致さしむれば、我れ、また何の顔か、あらんや」と。これ、唐の道琳 (7c)、那爛陀寺 (Nālandā) にありて、義浄 (635 ~ 713) の為に論述する所なり。道琳、深く呪明に通じ、その言、洵に信ずべきとす。呪明蔵の結集、すなわち実に、難陀を以て濫觴とすること、可なり。初めに一万二千頌あり。蓋し後世に、次第に増備する者なり。恨むらくは、今、また難陀の原集を知る由なし。

## 三十、東晋の尸梨蜜多羅、始めて呪経を訳し、また呪法を伝う

東晋 (317 ~ 420) の尸尸梨蜜多羅 (Sīmitra, ~ 317 ~) (吉友)、西域国王の子なり。永嘉中 (307 ~ 313) の始めに到り、元帝 (317 ~ 322) の時、『大孔雀王神呪経』・『孔雀王雜神呪経』(各一卷) を訳し、咸康中 (335 ~ 342) に卒す。年、八十余なり。善く呪術を持し、向う所、皆、驗す。盛り建康(現在の南京)に行き、時の人、呼びて高座法師とす。

### ①孔雀呪法

初め、江東（現在の江蘇省南部、浙江省北部）に未だ呪法あらず。蜜多羅、すなわち、孔雀王神呪を伝う（『出三藏記集』<sup>(10)</sup>十三・『歴代三寶記』七・『高僧伝』一・『開元録』三・『貞元録』五<sup>(14)</sup>）。

### ②結界

『孔雀王經』二部、今、共に存せず。但しその結呪界法、載ち蕭梁の僧伽婆羅（Sanghapāla, ca.460～524）訳の『孔雀王呪經』<sup>(15)</sup>の末にあり。結界の名、元、律部に出づ。僧衆の所住の界を限るを以て、義とす。然るに密教の謂う所の結界、すなわちこれと異なる。その意、主に呪場の辟邪にあり。蓋し、また婆羅門教に由りて来る。

但し『善見律毘婆沙』<sup>(17)</sup>（卷十七）に説く所の五種の結界（方、円、鼓形、半月、三角）の如き、密教の壇形と、その本を同じうする者なきにあらず。

### ③三重の円壇

『孔雀經』の結界、すなわち円壇を用う。三重の規界を作り、香爐・燈・幡・鏡・刀を配備す。

### ④牛尿、地に泥み、芥子、火に焼る

また「牛尿を地に泥み、芥子を火に焼る」と説く。前出の『摩登伽經』<sup>(18)</sup>の旃陀羅母の行ずる所の外道の護摩法、ここに至りて、現然として仏教の中に入る。

### ⑤呪術なりや、邪術なりや

『仏祖歴代通載』<sup>(20)</sup>（卷十六）に曰く、「東晋の尸梨蜜より已降、秘呪を宣訳す。要するに、その大婦、鬼神を祀り、

邪妄を驅り、人の為に災を禳い、患を積くに過ぎざるのみ。その間、往往に、名を比丘に仮り、外国より来たり、術を挟み、愚を驚かすことなきにあらず。いわゆる羅漢法者あり。正に、么磨邪術にして、下劣の技なり。また、猶お道家の雷公法の如きの類なり」と。蓋し、真に然り。

#### ④呪経の初作

密法の震旦に伝うること、実に蜜多羅を以て、初祖とす。想うに、印度の呪経の述作、蓋し、また晋代に昉まるのみ。

#### 三十一、失詛の古呪経

然るに、後漢の失詛と称する者に、『安宅神呪経』・『安宅陀羅尼呪経』(『七仏安宅神呪経』、これと同本か)・『辟除賊害呪経』(『呪賊呪法経』、これと同本か)・『觀世音所説行法経』(呪経)・『五龍呪毒経』・『取血鬼神呪経』(各一卷、『開元録』一・『貞元録』一)あり。梁の僧祐(445～518)、その年代を記さず(『出三藏記集』四)。隋の費長房(597～)、すなわち権に「後漢の録」に附し、詮定し難き者とす(『歴代三宝記』四)。

#### ①四神

按ずるに、『安宅神呪経』に、青龍・白虎・朱雀・玄武の四神の名あり。これ、印度の談ぜざる所なり。それ、支那の撰述と為すこと、知るべきなり。今、姑く、ここに附す。

『賊害呪経』に一呪あり。その礼仏作法に云く、「仏前に於て、七灯を然し、膠香を焼き、華を散じて、この呪を説くこと七遍なり」と。

『安宅陀羅尼経』、古きに致して、見るべきなし。

『觀音行法経』以下の三部、並びに佚して存せず。

この諸経、蓋し、皆、蜜多羅以後の出なり。

### 三十二、曇無蘭の訳経

曇無蘭(Dharmaraksā?, ~381~)(法正)、西域の人なり。太元六年(381)より二十一年に至るまで、揚都(現在の南京)にありて、経を訳す。『陀隣尼鉢経』・『玄師毘陀所説神呪経』・『檀特羅麻油述経』・『摩尼羅賣経』・『呪時氣病経』・『呪齒経』・『呪目経』・『呪小兒経』・『孔雀王呪経』・『七仏所結麻油述経』・『大神母結誓呪経』・『伊洹法願神呪経』・『解日厄神呪経』・『六神名神呪経』・『麻油述呪経』・『摩尼羅賣神呪按摩経』・『医王惟楼延神呪経』・『龍王呪水浴経』・『十八龍王神呪経』・『請雨呪経』・『止雨呪経』・『嗽水経』・『幻師阿夷鄒神呪経』・『呪水経』・『葉呪経』・『呪毒経』・『呪牙痛経』・『呪眼痛経』(各一卷、『開元録』三、『貞元録』五、『歴代三才記』七、更に『持句神呪経』を加う)あり。

この中の『陀隣尼鉢経』、すなわち『持句神呪経』と同本異訳なり。

『玄師毘陀経』に、除害の呪一首あり。<sup>(45)</sup>

『檀特羅麻油述経』に、また神名の呪一首あり。これを誦さば、すなわち能く鬼神の諸難を辟くと説く。<sup>(46)</sup>

『摩尼羅賣経』は、呪を持する種々の機能を説く。<sup>(47)</sup>

#### ① 結縷

『呪時氣病経』に一呪ありて、結縷繫頭を説く。<sup>(48)</sup> 結縷は、すなわち後代の密教の金剛線の濫觴と為る者にして、始めてこの経に出づ。

#### ② 神線

蓋し、婆羅門の神線(sutra, yajñopavīta)と、その本を同じうす。

『呪齒』・『呪目』・『呪小兒』の三経に、おのおの一呪あり。  
『孔雀王呪』以下の二十経、すなわち佚して伝えず。

### 三十三、僧伽提婆の訳経

瞿曇 (Gautama) 僧伽提婆 (Saṅghadeva, 391-) (衆天)、罽賓の人なり。学、三蔵に通じ、誦持する所多し。苻秦 (351 ~ 394) の建元中 (365 ~ 385) に、長安に來り、孝武 (372 ~ 396) の太元十六年 (391)、江左 (現在の江蘇・浙江省周辺) に至る。慧遠 (334 ~ 416) の迎うる所となりて、廬山に入る。隆安元年 (397)、建康に遊び、行間に経を訳す。後に終る所を知らず。

その訳出する所に、『龍王結願五龍神呪』・『大將軍神咒』の二経あり (『開元録』三、<sup>(49)</sup>『貞元録』五。<sup>(50)</sup>『歴代三寶記』七は曇無蘭訳とす)。共に佚して今に伝えず。

### 三十四、杯度の呪術

杯度 (1 ~ 426) は、俗姓の名字を詳らかにせず。初め、冀州 (現在の河北、山西の二省と河南省北部) にありて、後に建康に遊ぶ。常に木杯に乗りて、水を度る。これに因りて、名を得。行蹟に神異多く、呪を以て、能く病を治す。宋 (420 ~ 479) の元嘉三年 (426) 九月、赤山湖 (現在の江蘇省包容市近郊) に至り、痢を患いて死す。 (『高僧伝』十・『法苑珠林』六十一)<sup>(51)</sup>

### 三十五、仏陀跋陀羅の訳経

仏陀跋陀羅 (Buddhabhadra, 359 ~ 429) (覺賢)、本姓、釈子なり。中印度の迦維羅衛国 (Kapilavastu) の人にして、甘露飯王 (Amritodana) の苗裔なり。祖父の達磨提婆 (Dharmadeva)、嘗て北天竺に商旅し、因りて居す。少くし

て孤貧なり。從祖、その聡敏なるを聞きて、迎え還し、度して、沙弥とす。受具の後、罽賓に遊び、止住すること積載、常に遊方弘化を志すことあり。秦の僧智嚴（一428）、罽賓に至り、跋陀羅の道名を聞きて、その東遊を促すに会う。是に於て、糧を裹み、葱嶺（Panir）を度る。跋渉すること三年、路、六国を経て、南、交阯（現在のハノイ周辺）に至る。舶を駕し、海を循りて行き、遂に青州東萊郡（現在の山東省）に達す。羅什（Kumarajiva, 344～413）の長安にあるを聞き、すなわち往きて、これに従う。後に南征し、隆安二年（398）より宋（420～479）の永初二年（421）に訖るまで、揚都、及び廬山に於て、經を訳す。元嘉六年（429）、泥洹（nirvāṇa）す。春秋、七十有一なり（『三藏記集』十四、『高僧伝』一、『歴代三宝記』七、『開元録』三、『貞元録』五）。  
訳す所に、『出生無量門持經』（一卷）あり。前出の『無量門經』と同本異訳なり。しかも、その缺する所の八字呢を補い、また、その字義を説く。

#### ① 四方四仏

『觀仏三昧海經』（十卷、方等）もまた、跋陀羅の訳す所なり。四方四仏の説、始めて、この經に出づ。曰く、東方妙喜国の阿閼仏、南方歡喜国の宝相仏、西方極樂国の無量寿仏、北方蓮華莊嚴国の微妙声仏（卷九）、これなり。後の胎金兩部の四仏、これと、あるいは合し、あるいは合さずといえども、その権輿、すなわち実に、ここにあり。

#### ② 觀仏法

また、觀仏像法を説く（卷九・十）。その法は、「まず、仏塔に入り、好香泥及び諸の瓦土を以て、地に塗りて、淨めしむ。その力能に隨いて、焼香散華して、仏像を供養す」。後に結跏趺坐し、一像・二像・三像、乃至、十像を觀想し已て、一室内・一僧坊・一頃地、乃至、一世界、中に満つる仏像、間に空欠なしと想い竟りて、一切時中に恒に仏像を見るに至る。また、化仏菩薩の身相・身色・光明・華台・幡蓋・持物等を説く。諸の『般舟三昧經』の所説に較ぶるに、

観想の法、益す精きを見る。

③三昧の諸名、密教に類する者

また、経の中に説く所の種々の三昧の名目、陀羅尼印相・法界性・滅諸魔相・大空智・遍一切処色身・菩薩摩訶薩金剛相・金剛頂等の如し<sup>(68)</sup>。頗る密教の唱道する所と相類す。

④金剛神、曠野鬼を降伏す

また(巻六)、密迹金剛神、金剛杵・大利劍を揮て、以て曠野鬼を降伏するを説く<sup>(69)</sup>。これ、すなわち密教の降三世明王の三昧、及び金剛手菩薩の自在天を降伏すの話説と、相似す。

跋陀羅の訳す所に、また、『大方広仏華嚴經』<sup>(70)</sup>あり(六十卷、元熙二年(420)六月十日出<sup>(71)</sup>)。その梵本、昔道人支法領(〜392〜)、于闐より、これを得と称す(『出三藏記集』九)<sup>(72)</sup>。その述作年代、蓋し、西晋(265〜316)の時にあるか。後に、唐代(618〜907)に至りて、実叉難陀(Sikṣānanda, 652〜710)、更に『八十卷經』<sup>(73)</sup>を訳す。すなわち増訂本なり。二経、大抵、相似す。

⑤華嚴の教主、及び説処

ただ、旧訳の教主、盧舎那なり。新訳、これを毘盧舎那と謂う。毘の義、すなわち遍なり。盧舎那の義、すなわち照なり。これを連ねて、以て、その身格を向上するのみ。あるいは釈尊を以て応身とし、盧舎那を報身とし、毘盧舎那を法身とす。あるいは毘盧舎那を自性身とし、釈尊を變化身とす。固より皆、釈尊の身格の異称に過ぎず。これを要するに、法身にして法を説くこと、この経を以て宗とす。それ、これを説くこと、七処九会に於てす。すなわち人間の三処五会(菩提場一会、普光明殿三会、逝多林一会)、天上の四処四会(須弥山頂忉利天 [trayastriṃśat]、夜摩天宮 [yama]

兜卒天宮 (tusita) 他化自在天宮 (paranirmitavasavartin) 各一会、これなり。

### ⑥三界の諸天

そもそも仏教に談ずる所の三界諸天に二十八あり。曰く、欲界に六あり。すなわち四天王 (caturmahārājakāyika) ・ 忉利・夜摩・兜卒・化樂 (nirmanarata) ・ 他化自在天なり。曰く、色界に十八あり。すなわち初禪に三あり、梵衆 (brahmakāyika) ・ 梵輔 (brahmapurohita) ・ 大梵天 (mahābrahman) なり。二禪に三あり、少光 (paritābha) ・ 無量光 (apramāṇabha) ・ 光音天 (bhāsvara) なり。三禪にまた三あり、少淨 (paritasāṅgimūsubha) ・ 無量淨 (apramāṇasubha) ・ 遍淨天 (subhaktisna) なり。四禪に九あり、無雲 (anabrakā) ・ 福生 (puṅgavasa) ・ 無想 (asaṃhita) ・ 広果 (bṛhaphala) ・ 無煩 (abrha) ・ 無熱 (atapa) ・ 善見 (sudarśana) ・ 善現 (sudṛśa) ・ 色究竟天 (akaniṣṭha) なり。曰く、無色界に四あり。すなわち空無辺処 (ākāśanantyāyatana) ・ 識無辺処 (vijñānāntyāyatana) ・ 無所有処 (ākimcanyāyatana) ・ 非想非非想処天 (nāivasamjñānāsatānata) 此れなり。

四天王天、須弥山の半ばにあり。忉利天、その山頂にあり。爾余の諸天、層層としてその上に位す。皆、雲に憑りて住す。但し、四禪以上、方にこれ空居なり。身長・寿量・衣重・光明・飲食等の諸福報、おのおの差あり。人、その修むる所の善業に因り、ここに生ずることを得。故に通じて、これを生天と謂う。欲界の頂に、魔王宮あり。色界の頂に、摩醯首羅天王宮あり。無雲・福生・広果の三天、凡夫、善を修めて生ずることを得。無想天、すなわち外道の居す所なり。無煩以上の五天、淨居と云い、また不還と云い、三果聖人の居す所なり。また須弥山の半ばに当たり、虚空中に日月星宿天あり。四天王の居す所の下に、山根上を升ること一萬由旬に至る間、下に向かいて放逸・持鬘・墜手(常醉・華鬘、器手)の三天あり(『長阿含』・『起世因本』・『三界差別』等の経、『俱舍』・『阿毘曇』・『毘婆沙』等の論)。但し、華嚴経の説会の列衆の中、色界に、ただ光音・遍淨・広果・大自在天の四天のみありて、余の諸天なし。蓋し後代に漸く分化して十八天と為るのみ。

## ⑦ 四天王

四天王とは、毘沙門 (Vaisravana)・持国 (Dhṛtarāṣṭra)・增長 (Virūdhaka)・広目 (Virūpākṣa) の四神の居す所なり。毘沙門、すなわち上に出づ。持国天、乾闥婆衆 (Gandharva) の王とす。增長天、鳩槃荼 (Kumbhāṇḍa) の首領とす。広目、あるいは魯拏羅 (Rudra) の一名とす。あるいは薬叉 (Yakṣa)・羅刹 (Rākṣasa)・龍王 (Nāgarāja) なり。もしは湿縛 (Śiva) の眷属中に、またその名あり。並びに外道の談する所なり。その神位を卑くせんが為に、忉利天の下に置かる。

## ⑧ 帝釈天

『華嚴經』の説処、すなわち欲界中の三天にあり。その忉利天とは、すなわち帝釈 (Indra) の住する所なり。蓋し印度古代の民、漸く遊牧の俗を変え、農耕に従事す。その恐る所、最も旱魃にあり。これに因りて、深く帝釈を崇む。帝釈とは、すなわち天界の王にして、雷雨の神なり。常に六牙の白象に騎り、農民の献ぐ所の蘇摩 (soma) の杯を挙げ、手に金剛杵を把り、往きて阿修羅と戦う。その執持する所の兩宝蔵を破して、膏雨を地上に降し、田野滋潤し、枯禾再緑す。農民、歡喜して、頌を献ぐ。

## ⑨ 夜摩天

その生活に安きを得るに及ばば、すなわち死後、好処に往生せんと願いて、夜摩天に帰依す。夜摩とは、能く人間の靈魂をして、その天に住して、上妙の果報を受けしむ。故に、梨俱吠陀 (Rgveda) 盛りに、この三天を頌う。後に補羅拏 (Purāṇa) に至りて、その説、漸く変じ、すなわち夜摩を以て人間の司命の神とす。是に於て怖畏の念、すなわち加う。呼びて伽羅 (Kāla) と曰ふ、また閻魔 (Yama) ちた (Suyāma) と曰ふ。閻摩とは、終息制止の義なり。

註

- (1) 拙著「大村西崖著『密教發達志』 訳注研究(一)」(『大正大学研究紀要』 98、大正大学、2013)、「大村西崖著『密教發達志』 訳注研究(二)」(『大正大学研究紀要』 99、大正大学、2014)、「鉄塔相承説をめぐって——大村西崖著『密教發達志』 訳注研究(三)——」(小澤憲珠先生頌寿記念論文集『大乘仏教と浄土教』(仮題)、小澤憲珠先生頌寿記念論文集刊行委員会、2015)
- (2) 『法苑珠林』(T. vol.53, pp.744c ~ 746c)
- (3) 『高僧伝』(T. vol.50, pp.383b ~ 387a)
- (4) 『晋書』(『晋書』 vol.3, 古典研究会, 1971, pp.1209a ~ 1212b)
- (5) 『高僧伝』(T. vol.50, p.389a)
- (6) 『法苑珠林』(T. vol.53, p.744a ~ c)
- (7) 『高僧伝』(T. vol.50, p.388a ~ c)
- (8) 『法苑珠林』(T. vol.53, p.859c)
- (9) 『大唐西域求法高僧伝』(T. vol.51, pp.6c ~ 7a)
- (10) 『出三藏記集』(T. vol.55, pp.98c ~ 99a)
- (11) 『歷代三宝記』(T. vol.49, p.69a)
- (12) 『高僧伝』(T. vol.50, pp.327c ~ 328a)
- (13) 『開元釈教録』(T. vol.55, p.503a ~ b)
- (14) 『貞元新定釈教目録』(T. vol.55, p.800a ~ b)
- (15) 『孔雀王呪経』(T. vol.19, No.984)
- (16) 同右 (T. vol.19, pp.458c ~ 459a) に「結呪界法 帛尸梨蜜前出」として出している

- (17)『善見律毘婆沙』(T. vol.24, p.793a)「結界に五種あり。一に方、二に円、三に鼓形、四には半月形、五には三角なり。」  
 (18)『孔雀王呪経』(T. vol.19, p.459a)  
 (19)『摩登伽経』(T. vol.21, No.1300)  
 (20)『仏祖歴代通載』(T. vol.49, No.2036)  
 (21)同右 (T. vol.49, pp.593c ~ 594a)  
 (22)『仏説安宅神呪経』(T. vol.21, No.1394)  
 (23)『仏説安宅陀羅尼呪経』(T. vol.19, No.1029)  
 (24)『安宅陀羅尼呪経』の名は『出三蔵記集』、『開元録』、『貞元録』のいずれにも見あたらない。しかし、『出三蔵記集』には「七仏安宅神呪」(T. vol.55, p.31c)の名が見られ、『開元録』(T. vol.55, p.484a, 635b)や『貞元録』(T. vol.55, p.781a, 969c)には後漢の失訳として「七仏安宅神呪経」の名が見られる。大村は、この「七仏安宅神呪経」が現存している『安宅陀羅尼呪経』であると考えたのであろう。
- (25)『仏説辟除賊害呪経』(T. vol.21, No.1406)  
 (26)『辟除賊害呪経』の名は、『出三蔵記集』で「呪賊一卷(或いは辟除賊害呪と云ふ)」(T. vol.55, p.31c)とあり、呪賊の別名として出てくる。『開元録』では、「呪賊経一卷(一に辟除賊害呪と名く)」(T. vol.55, p.480b)とするが、さらに「呪賊呪法経」の名を出して「祐、直に呪賊と云ふ」(484a)とし、さらに安世高訳として「呪賊経一卷(一に除辟賊害呪と云ふ)」(633a)を挙げ、『出三蔵記集』に挙げる呪賊経とは別本であるとするが、その上に後漢の失訳として「呪賊呪法一卷(異本)」(635b)を挙げる。つまり、呪賊経で別名が辟除賊害呪といわれるものに二本あり、一本が安世高訳、一本が後漢の失訳であったのであろうか。
- (27)『開元釈教録』(T. vol.55, pp.483c ~ 484a)  
 (28)『貞元新定釈教目録』(T. vol.55, pp.780c ~ 781a)

- (29) 『出三藏記集』では、「新集統撰失訳雜經錄第一」の中に、翻訳年代は解らないが、現存しているものとして、これらの經名を挙げている (T. vol.55, p.21b ~ c, p.32a)。
- 『歷代三宝記』 (T. vol.49, p.55c)
- (30) 『仏説安宅神呪經』 (T. vol.21, p.911c)
- (31) 『仏説辟除賊害呪經』 (T. vol.21, p.922a)
- (32) 『仏説陀隣尼鉢經』 (T. vol.21, No.1352)
- (33) 『仏説玄師殿陀所說神呪經』 (T. vol.21, No.1378)
- (34) 『仏説檀特羅麻油述經』 (T. vol.21, No.1391)
- (35) 『仏説摩尼羅直經』 (T. vol.21, No.1393)
- (36) 『仏説呪時氣病經』 (T. vol.21, No.1326)
- (37) 『仏説呪齒經』 (T. vol.21, No.1327)
- (38) 『仏説呪目經』 (T. vol.21, No.1328)
- (39) 『仏説呪小兒經』 (T. vol.21, No.1329)
- (40) 『開元釈教錄』 (T. vol.55, pp.503b ~ 504b) '呪目經が挙げられていない'
- (41) 『貞元新定釈教目錄』 (T. vol.55, pp.800c ~ 801b) '呪目經が挙げられていない'
- (42) 『歷代三宝記』 (T. vol.49, p.69b ~ 70b) '呪目經が挙げられていない'
- (43) 支謙訳『仏説持句神呪經』 (T. vol.21, No.1351)
- (44) 『仏説玄師殿陀所說神呪經』 (T. vol.21, p.901c)
- (45) 『仏説檀特羅麻油述經』 (T. vol.21, p.908a) 趣意
- (46) 『仏説摩尼羅直經』 (T. vol.21, pp.910b ~ 911a) では、呪を持つ功德ではなく、「摩尼羅直經」を念じたり、讚
- (47)

じたり、読んだりする功德を説いてゐる

- (48) 『仏説呪時氣病經』(T. vol.21, p.491a)  
 『開元釈教錄』(T. vol.55, pp.504b ~ 505b)
- (49) 『貞元新定釈教目錄』(T. vol.55, pp.801c ~ 802b)では、僧伽提婆の訳として『中阿含經』など五部二百十八卷を挙げるが、その中に「これら二經の名はなく、五經の名の直前に挙げてゐる(801b)ので、僧伽提婆の訳出と考えられていない。
- (50) 『歷代三宝記』では、僧伽提婆の訳出として『貞元錄』と同様に五部の經名を挙げてゐるが、その中に、これら二經の名はなく(T. vol.49, p.70c)「曇無蘭の訳出として、『龍王結誦五龍神呪經』と『大神將軍呪經』の名がある(70a)。
- (51) 『高僧伝』(T. vol.50, pp.390b ~ 392b)  
 『法苑珠林』(T. vol.53, pp.746c ~ 748b)  
 『出三藏記集』(T. vol.55, pp.103b ~ 104a)  
 『高僧伝』(T. vol.50, pp.334b ~ 335c)  
 『歷代三宝記』(T. vol.49, p.71a ~ b)  
 『開元釈教錄』(T. vol.55, pp.505b ~ 506c)  
 『貞元新定釈教目錄』(T. vol.55, pp.802b ~ 803c)  
 『仏説出生無量門持經』(T. vol.19, No.1012)  
 支謙訳『仏説無量門微密持經』(T. vol.19, No.1011)  
 『仏説出生無量門持經』(T. vol.19, p.684a)「波羅婆伽闍陀睺叉」の八字と、その字義を説いている。  
 『仏説觀仏三昧海經』(T. vol.15, No.643)

- (63) 同右 (T. vol.15, p.689a)
- (64) 同右 (T. vol.15, p.690c)
- (65) 同右 (T. vol.15, pp.690c ~ 691b)
- (66) 同右 (T. vol.15, p.693a ~ c)
- (67) 支婁迦讖訳『仏説般舟三昧経』(T. vol.13, No.417)‘支婁迦讖訳『般舟三昧経』(T. vol.13, No.418) なす
- (68) 『仏説観仏三昧海経』(T. vol.15, p.653c)
- (69) 同右 (T. vol.15, p.679a)‘大正藏では卷七’
- (70) 『大方広仏華嚴経』(T. vol.9, No.278)
- (71) 『出三藏記集』(T. vol.55, p.61a)
- (72) 『大方広仏華嚴経』(T. vol.10, No.279)
- (73) 『長阿含経』(T. vol.1, pp.135c ~ 136a)
- (74) 『起世因本経』(T. vol.1, p.403b)
- (75) 『三界差別』と題する経典は見あたらず。あるいは『分別善悪報応経』(T. vol.1, pp900c ~ 901a)を指すか？
- (76) 『阿毘達磨俱舍論』(T. vol.29, p.41a)
- (77) 『阿毘曇心論』(T. vol.28, p.826b)
- (78) 『阿毘達磨大毘婆娑論』(T. vol.27, p.424c, p.518a, p.691c, p.766a)